

+ 4 4 【いてて】

【どっちもどっちも】と懐爺の友情話をききましたが、懐爺が【どっちもどっちも】を女性とおもっていたのか男性とおもっていたのかは、ききそびれました。

どうしてききそびれたかという、それが異性という垣根を超えた話だったからでしょう。

ぼくは、このさいだからと、他におぼけの友達がいなかったかどうかを尋ねました。

「そうですね。【どっちもどっちも】は学問上の友達、【いてて】は武術上の友達でしたね」

「【いてて】 たあ、いたそうなのなまえじゃのう」

「はい。【いてて】は射手座生れで、先祖は那須与一だということでした」

「なすのよいちたあ、あのよしつねのけらいかい」

義経好きのぼくは、例の那須与一の扇落としをしていました。

「はい。【いてて】も弓矢の達人で、射殺（いころ）した相手は百人以上といます」

「そのあいては、わるいやつじゃろうが、それにしても【いてて】は、ざんにんなおぼけじゃのう」

「はい。こころは羊よりも優しい、かおは大仏様よりも優しい。それがひとたび狂うと、こころは悪魔よりも残忍で、かおは悪鬼よりも醜悪になります。そのふだんのかれとふだんではないかれとの格差、落差が、わたしたちに畏怖をかんじさせました」

このときなぜか、思い当たることがありました。

ただの勘（かん）でしたが、ぼくはきくことにしました。

「もしかして、【きめんとう】をやっつけたのは、かいじいでのをうて、【いてて】かのう」

「おや。金ちゃんは【きめんとう】事件をごぞんじだったのですか」

「ごぞんじよ。そんちょうさんに、きいとったでな」

「そうですか」

といったまま懐爺はしばし俯いていました。

「かいじい、しょうじきに、はくじょうしろや」

懐爺の首をしめる真似（まね）をして、ぼくは問いつめました。

「黙ってあの世までもっていくつもりでしたが、金ちゃんに問われては嘘はつけません。半世紀以上前のことを正確には伝えられませんので、あえてかんたんに説明します。あのとき、わたしは山寺を焼かれて和尚さんが殺されたことに激怒（げきど）して【きめんとう】を皆殺しにしたわけではありません。わたしがかけつけたときは、すでに【きめんとう】と【いてて】の、おぼけ同志の壮絶（そうぜつ）な闘いが始まっていました。けれども【きめんとう】は全員鎧兜（よろいかぶと）に身をかためていますから、【いてて】の弓矢が威力（いりよく）を発揮しません。さすがの【いてて】も劣勢で半死半生（はんしはんしょう）の状況でした。そこで、そこで、あとは村長さんの話したとおりです」

「なるほどのう。それで【いてて】はどうなったのかのう」

「村びとたちがくるまえに、わたしが手厚く葬りました。なぜなら【いてて】は死ぬと、いやそれ以前に闘っているときから、それはそれは恐ろしい容姿に変化していたのです。その容姿を村びとたちに見せたくはない。大仏さまが悪鬼になってしまうのですから。村びとたちにとっての【いてて】の印象を、どうしてもわたしは大仏さまのままにしてあげたかったのです。はい、いまでも【いてて】はお寺の本堂で大切に奉られています」

「なるほどのう」

ぼくは懐爺と【いてて】の友情の深さをおもいました。

ぼくも完ちゃんに対して、こんな友情を永遠に持ち続けたいとおもいました。